

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：18001
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011 ～ 2012
 課題番号：23720184
 研究課題名（和文） 「難民」たちの文学活動—植民地期における朝鮮人の日本語文学作品について
 研究課題名（英文） The Literary activity of "Refugees" --About the Japanese language literary work by Korean writers of the colonial era of Korea.
 研究代表者
 呉 世宗 (O SEJON)
 琉球大学・法文学部・准教授
 研究者番号：90588237

研究成果の概要（和文）：

本研究は、①植民地的観点から従来の難民概念を拡張し、②その難民概念に照らしながら、日本語を母語としない、植民地期の朝鮮人文学者達の日本語による文学活動及びその作品の意味を問い直すことを目的とした。

以上の目的のもと、資料の収集、「難民」概念の再検討、植民地期に日本語と朝鮮語で文学活動を行った文学者についての検討、さらに「対形象化」や「植民地的主体」といった用語の批判的検討を行った。

研究の結果、「植民地的主体」といった諸概念は、親日派／民族派、抵抗／協力といった枠組みの不十分さを補う一方、当時の〈日本語文学〉の多くが植民地体制擁護的な側面を低く見積もる危険性があること、さらに当時の作家の立場についての説明を困難にするものであることを明らかにした。すなわち準日本人の立場でもあり、難民的でもあった朝鮮人文学者と、彼らが生み出した準日本語的な作品の意義や問題を見逃してしてしまうものであることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This research aimed at the following thing.

- (1) extending the conventional refugee concept from a viewpoint of a colony,
- (2) comparing with the refugee concept, it is reflecting upon the meaning of the Japanese language literary work by the Korean writers of a colonial era who although Japanese is not a native language, but use it.

The following thing was performed on this purpose. collection of data, reexamination of a "refugee" concept, and examination about the writers of a colonial era. Furthermore, critical examination of the term a "colony subject", "con(tra)-figuration".

As a result of research, (1)the concepts of a "colonial subject" etc were compensated with the insufficiency of frameworks, such as a pro-Japanese group/ethnic nationalist groups, and resistance/cooperation. However, although there was a danger that many of <Japanese language literature> of those days would protect colonial system, they had a problem which estimates it low too. (2) It was shown clearly that it is what gives difficult further explanation about the position of a writer of those days. Namely, It became clear that it is what overlooks the meaning and the problem of the Korean writers who was a semi-Japanese position and also refugee-like and a semi- Japanese language work which they produced.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・文学一般

キーワード：比較文学論・ポストコロニアル文学理論

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、植民地期に朝鮮半島に持ち込まれた日本語が、朝鮮人の認識、思考、感性に与えた影響と、反対に朝鮮人による日本語使用が言語に及ぼした影響を文学作品を通じて考察してきた。とりわけ植民地末期に日本近代詩を学校教育を通じて内在化した詩人・金時鐘（1929～）の日本語詩に焦点を当てて、朝鮮人と日本語の関係を考察してきた。

以上の目的のもと、主に次のような研究成果を公表してきた。

①金時鐘が内在化した日本語の質を明らかにするために、彼が植民地期に愛読した金素雲訳『乳色の雲』（1940）における原詩（朝鮮語）と訳語（日本語）の関係を明らかにした（呉世宗（2008））。

②日本近代詩の主要な構成要素である「リズム」と「抒情」の近代化過程を、明治20年代に起きた「リズム」と「抒情」を巡る議論を追いかけることで明確にした（呉世宗（2009））。

③金時鐘が日本近代詩を乗り越えるための詩作上の方法である「短歌的抒情の否定」を確立させるにあたって影響の大きかった、小野十三郎の思想を再構成した（呉世宗（2007））。

④金時鐘の日本語を用いた詩的表現の意味を明らかにするために、彼の代表的詩集である『長篇詩集 新瀉』を詳細に読み解いてきた（呉世宗（2005、2006））。以上の成果は博士論文としてまとめ、『リズムと抒情の詩学—金時鐘と「短歌的抒情の否定」』として出版した（呉世宗（2010））。

残された課題としては、植民地期に多く生まれた朝鮮人文学者達の日本語文学作品を、これまで得た知見を基に分析することが挙げられる。

植民地期における朝鮮人の日本語文学作品は、主に1940年代前半に多く生み出されたが、韓国では長らく「親日文学」として断罪されてきた（e.g. 林鍾国（1966））。しかし近年に至り、日本語／朝鮮語、抵抗／協力といった短絡的な枠組みを問題視しつつ、再検討する作業が行われはじめている（e.g. 鄭百秀（2000）、金允植（2003）、金在湧（2004）、尹大石（2006））。それらの研究は、個々の作品を緻密に分析することで、「親日文学」という枠組では捉えきれない作品の意義を明らかにしている。しかし他方で、それらの研

究は、植民地期の日本語文学作品の多くが植民地体制擁護的な側面を帯びた事実を、ともしれば看過する危険性も抱えている。というのも、「不十分な日本語」（佐藤春夫）と言われ、日本語／朝鮮語の〈狭間〉に位置付けられてきた朝鮮人の日本語作品は、近代的／反近代的、植民地従属的／反植民地的な相反する価値を意図せずに内在させており、バランスの取れた読みを難しくしているためである。

そのため朝鮮人の日本語作品の意義を汲み取るためには、単なる断罪でもなく、また作品に秘められた可能性を汲み出すことだけで留まらない、別様の批判的な視座に立った再読の試みが必要となっている。その際重要なことは、〈狭間〉に対する視角であるが、準「日本人」的立場であった朝鮮人文学者と彼らが生み出した作品（準「日本語」的作品）とを、「難民」たちの文学活動と捉えることが、有効な視角になると考えた。

近年、〈狭間〉に置かれた朝鮮人を「難民」概念と結び付けて論じる研究としては、市民権との絡みで論じた鄭暎恵（2002）や、「半難民」といった視座から論じた徐京植（2002）などがある。また「難民」を巡る議論は、国際法の領域（e.g. 阿部浩己 2003）だけでなく、社会学（e.g. 山岡健次郎 2009）、国際政治（e.g. Zolberg and Benda eds. 2001）、思想（e.g. Benhabib 2004）等の各方面まで広がってきている。だが、植民地化に伴う国籍の剥奪によって難民的存在と化すことを、現在の難民概念の拡張を通じて論じた研究は、ほぼない状態である。また被植民者たちの宗主国の言語による文学活動がもたらす自己規定の問題を、「難民」との関連で分析する研究も未開拓である。すなわち難民概念を通じて被植民者の文学活動の意味を問い直し、またそれにより難民概念を拡張するという、植民地と難民のダイナミズムの検討を通じた文学研究は、未開拓領域として残されている。

2. 研究の目的

本研究は、1940年代の植民地朝鮮における朝鮮人文学者たちによる日本語を用いた文学作品の創出を、「難民」たちの文学活動という観点から考察するものである。すなわち、①植民地的観点から従来の難民概念を拡張し、②その難民概念に照らしながら日本語を母語としない者たちの文学活動及び作品

の意味を問い直すこと、それが本研究の目的となっている。

3. 研究の方法

以上の学術的背景を踏まえ、本研究は現代において国境線上の存在者を示す「難民」概念を参照しつつ、〈狭間〉にある植民地期の文学者と作品を検討する。具体的に次の2点を研究目的としている。

(1) 植民地期に朝鮮と日本の間に置かれた朝鮮人たちを「難民」として位置付けるために、国民／難民という二分法に基づいて構成される現在の難民概念を理論的に拡張し、植民地的状況をも包摂しうる概念として再構築すること。

(2) 難民概念を用いて植民地期の朝鮮人たちの日本語文学活動を分析することで、その活動が書き手をいかに規定し、また作品をいかに性格づけているのかを検討すること。

4. 研究成果

本研究は、植民地期に多く生まれた朝鮮人文学者達の日本語文学作品を、「難民」たちの文学活動という観点から考察するものである。すなわち、①植民地的観点から従来の難民概念を拡張し、②その難民概念に照らしながら日本語を母語としない者たちの文学活動及び作品の意味を問い直すことを目的としている。つまり準「日本人」的立場であった朝鮮人文学者と、彼らが生み出した準「日本語」的な作品を、「難民」概念を用いて、「難民」たちの文学活動という枠組みで分析することを本研究は目的としている。

2011年度は、以上の目的のもと、論文「植民地朝鮮「暗黒期」の〈日本語文学〉の再検討のために——対形象化と植民地的主体について」をに発表した。そこでは、植民地期の日本語文学が現在韓国においてどのように検討されているのかを概観しながら、近年始まった植民地期の文学作品の再検討の先駆的な仕事である、鄭百秀『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』(2000)を中心的に取り上げて検討した。とりわけ「対形象化」と「植民地的主体」という用語を中心に分析を行った。

また11月には東京大学「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)主催のワークショップにて「「暗黒期」の〈日本語文学〉を再考する—予感することをめぐって」というタイトルで研究報告を行った。そこでは、植民地期に日本に渡り日本語と朝鮮語で文学活動を行った詩人・許南麒の日本語詩を中心的に取り上げ、経験と予感という観点からその作品の特徴について検討をした。

2012年度は、韓国へ渡航し、個々の作家の単行本だけでなく『国民文学』、『東洋之光』、『国民詩歌』等の植民地期の雑誌など、本研究に必要な資料の収集を行った。また韓国の李漢正先生、尹頌雅先生、櫻井信栄先生とワークショップを開き、植民地期の日本語文学が現在韓国においてどのように検討されているのかの概観、また「植民地的主体」や「分裂」といった解釈コードについての前年度の成果の批判的検討を行った。

その結果、近年の韓国での研究成果や「植民地的主体」といった概念は、親日派／民族派、抵抗／協力といった枠組みで作品を論じることの不十分さを補う一方で、個々の作品や作家に寄添い内在的に論じるというそのスタンスは、当時の〈日本語文学〉の多くが植民地体制擁護的な側面を帯びた事実を低く見積もってしまう危険性があること、さらに当時の作家の状況的な立場を曖昧にし説明を困難にしてしまうものであることがより明確になった。すなわち準「日本人」的立場であった朝鮮人文学者と、彼らが生み出した準「日本語」的な作品の存在の意味や意義を見逃してしてしまうものであることが明らかとなった。

この準「日本人」的立場、あるいは「難民」的立場に基づき、当時の作家たちを検討する過程でクローズアップされてきた詩人、許南麒の詩について深い分析を行った。その結果は、論文にまとめたうえで(掲載決定済み)、琉球大学法文学部主催のスタッフセミナーで報告を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①呉世宗「許南麒論」『論潮』6号、2013
(査読なし)

②呉世宗「植民地朝鮮「暗黒期」の〈日本語文学〉の再検討のために——対形象化と植民地的主体について」『琉球アジア社会文化研究』第14号(2011.10)
(査読なし)

[学会発表] (計2件)

①呉世宗「許南麒の詩を読む」、琉球大学、2012年10月

②呉世宗「「暗黒期」の〈日本語文学〉を再考する—予感することをめぐって」東京大学2011年11月

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

呉 世宗（ O SEJON ）

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90588237